

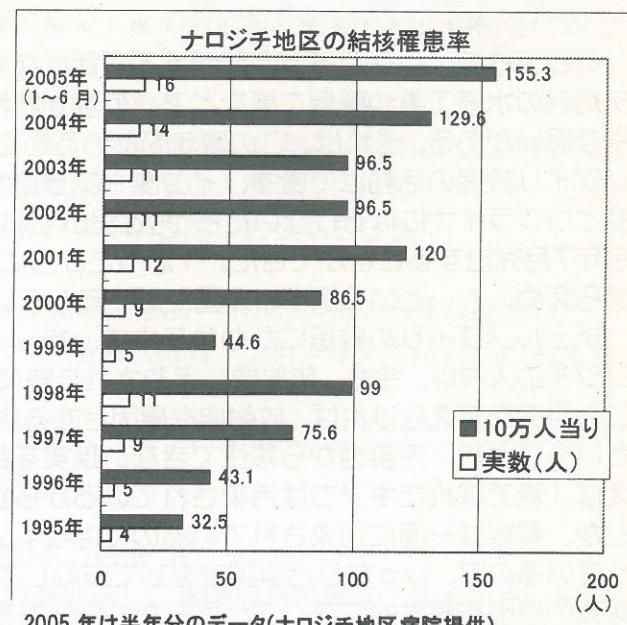
結核患者急増!! ナロジチ病院にレントゲン装置を!!

○ チェルノブイリ原発から南西に 70Km 離れたナロジチ地区は、本来ならば「住民が移住しなければならない」放射能汚染地域です。しかし、政府の移住政策が打ち切られ、今でも 1万人を超える人々が暮らしています。事故から 19 年経った今も、土壤には放射能が 60% 残り、食料や水が汚染され、キノコやブルーベリーは今でもほとんどが基準を超えるなど、人々の被曝は深刻です。その結果、免疫機能が衰え、感染症が激増しているのです。その典型的な例が、結核患者の増加です。状況が深刻であるにもかかわらず、地区病院のレントゲン装置は壊れたまま、正しい診断ができません。

何とかして、この地区病院にレントゲン装置を贈りたい!!

日本大使館の「草の根無償支援プログラム」への申請を準備中ですが、読者の皆様からも、是非、カンパをお願いしたいと思います。

○ レントゲン装置にはフィルムも必要で、これを継続的に供給しなければならないのです。結核激増の原因は、病院の診断だけが問題ではありません。原発事故で、ナロジチ名産だった「ナロジチ織り」の産業が崩壊しました。人々は、放射能の被曝に加え、貧困にも支配されているのです。



〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チエルノブイリ救援・中部 代表：市原佳代

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail : chachubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ : <http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

今後の支援のあり方を探る旅

(10月の代表団は、伊那の小牧さんと原さんです。)

今年1月のポレーシュで、キリチャンスキーさんは「津波の影響が、すぐ目に見えて感じられるものだとすれば、放射線は、人々を徐々に蝕んでいきます。何年も、何十年もかけて…地震と津波の犠牲者が20万人に上るとすれば、ジーミル州では、 Chernobyl 事故後18年の間に、住民数が同じ人数だけ減っています」と書きました。

1割をはるかに超す人口減少は、原発事故の長期的影響によるものでしょう。市場経済の波にのって、西欧化をはからうとするウクライナ社会の中で、放射能による被害は見えにくくなり、かたちを変えながら広がっています。来年は、事故から20年目を迎えます。

幼い我が子と、汚染地帯で病に苦しむ子ども達をだぶらせ、止むに止まれぬ気持ちに駆り立てられながら関わりだした救援活動ですが、その我が子も今は大人になって一人前の口を利くようになり、15年という時の流れを感じる今日この頃。こうしたギャップが、やや気分をおっくうにさせます。今回の訪問は、継続事業の確認もさることながら、「内部評価」を踏まえて仕切り直しをし、今後の支援のあり方を探る旅になりそうです。

代打役で行くことになった私に、そんな大役が務まるかどうか…。正直、不安でいっぱいですが、ウクライナにしっかりと馴染んだ原さんと一緒にします。どうにかなるでしょう。ついでに「黄金の秋」を楽しめます。

(小牧崇)

久しぶりに、ウクライナを訪問することになった。以前、放射能汚染地にあるナロジチ病院の水道工事や暖房工事などで、何度か訪れたことがあるが、今回の訪問は何か特別な思いがある。それは、この数年間というもの、怪我とC型肝炎の治療のため、Chernobyl 救援の活動はできず、インターフェロン注射のひどい副作用の中で、「もう二度とウクライナには行けないだろう」と思っていたからだ。しかし、2年間の治療の結果、今年7月完治することができた。「治ったからには行かねばならぬ。」「運命・宿命には逆らえぬ。」…という訳で、今回訪問することにした。

Chernobyl の救援にかかわる中で、ずっと考えてきたことがある。それは「ナロジチの人々は、今も、放射能に汚染された野菜・肉・卵・牛乳などを毎日食べている。この現実を変えなければ、放射能を原因とする病気と治療のイタチごっこは終わらない」ということだ。汚染地から移住できない現実を踏まえて、いったい何ができるのか。例えば「森で採れたキノコは汚染されているから食べちゃダメ！」といったチラシを配るとか、農地は一面に汚染されているのではなく、放射性物質が落ちた所が点状に汚染されているので、しっかり汚染調査をして安心して、作物を作れる「畑地図を作る」など、病気の原因を根本的になくす、何らかの方法を考え出さなければならない。

僕がナロジチに行っていた時、僕は毎日、庭で餌をついぱむニワトリの卵を食べ、ナロジチ産の肉・野菜・キノコ・じゃがいもなどを食べていた。汚染されていることが解っていても、あまりにも旨いので、つい食べてしまう。訪問者である僕がこれだから、自給自足の生活をしているナロジチの住民は、推して知るべし。爺さんはタケの一品にと川で魚を釣ってくるし、市場では解体したばかりの肉が売られている。そんな汚染生活から抜け出すために、何ができるのか？ 現地の集団農場・役場・病院の人達と、じっくり話してくるつもりだ。

(長野県南箕輪村：原 富男)



〈前回訪問時(若かりし頃)の小牧さん(左)と原さん〉



8月6日～7日、伊那で運営委員の合宿が行われました。「ポレーシュ」のバックナンバーを繰ってみると、今年で6回目となります。毎月の運営委員会では時間切れでじっくり話し合えなかった問題を、1日目の午後2コマ(1コマ2時間)、2日目の午前1コマ半と、たっぷりの時間で討議できます。昨年と同様、ヴィザ取得で一時帰国していた竹内さんも、参加しました。以下に、討議内容をまとめてみました。

1) ホステージ基金との関係のあり方

- (○) ホステージ基金に、事業の発案を自発的に行ってもらう。予算案を出す前に、次年度、どういう事業をしたいか提示してもらい、企画段階からチャレンジと話し合い、自立を促す。特に、外務省「草の根無償支援プログラム」への申請について、チャレンジは、各病院や施設のコンサルタントとして彼らをサポートする。ホステージ基金も、独自のプロジェクトを申請し、事業を遂行する。更には、ホステージ基金にも、前年度の事業評価をしてもらう。

2) 来年度事業について

州立小児病院とブルシーロフ病院の支援を、来年度以降は中止する。(自立をサポートする。) 粉ミルク支援は、日本の支援者から「粉ミルク」との費目指定で贈られた寄付金は粉ミルクにあてるが、不足分は今までのように一般寄付金からは補填しない。もはや、緊急援助ではなく、ウクライナ政府が担うべき援助である。

「ナロジチ病院のレントゲン機器と地域診療所整備」事業の申請は、継続して取り組む。被災者団体の医療支援については、民間医療保険制度加入実現にむけて、ホステージ基金と各団体・保険当局も交えて、誤解を解消するよう話し合ってもらう。

3) 北野プロジェクトについて

- (○) 医療機器メンテナンスと技術移転のための教育事業は、当初の計画の5年が経過した。これまでの活動に対して、現地(ホステージ基金・病院・工科大学)ではどうとらえているのか、評価とニーズを聞いてみる。
- 北野プロジェクトは、「カタログハウス」などへの申請事業として行う。「カタログハウス」は、人材育成事業を歓迎している。)

4) 新事業について

支援取りやめに伴って出た余剰金を、どのように使うか。
ナロジチの現状(農業・産業・失業率など)を調査し、被曝回避事業を、まず小さい規模で考える。(例えば、診療所で安全な食べ物を自給するとか…。)
消火活動による被曝問題。自動車と無線機の提供は効果があった。これもやはり現状を把握する必要がある。

5) 国内活動・広報

高校の生徒会に「ポレーシュ」を送り、私学フェスティバルに参加して呼びかける。
絵画展をやってもらう。スタディ・ツアーに参加してもらう。アレクシエーヴィチさんの講演録を出版する。…などを行って、チャレンジノブイリ20周年を盛り上げる。

フィールドワーク＆自主研修旅行

「救援・中部」の公式訪問と違ってプライベートですが、ただ今在籍中の大学院でのフィールドワークとして、この夏、ウクライナへ行つてきました。（神野美知江さん同行）

訪問先は、ジトーミル市のセルノブイリ事故被災者団体で、「救援・中部」の支援先である「セルノブイリの消防士たち」基金・「リクビダートル（事故処理作業者）」基金・「セルノブイリ障害者支援基金」の3団体と、カウンターパートである「ホステージ基金」、さらに広島の「ジュノーの会」が支援しているキエフ市の市民団体「ゼムリヤキ（同郷の人びと）」の計5団体です。公式訪問では毎回、病院視察や話し合いなどの仕事に追われ、「ホステージ基金」以外の団体を訪問して、活動や運営委員の人たちの気持ちを、じっくり聞く時間的ゆとりがありません。そこで、各団体をもっとよく理解したいと、聞き取り調査をさせてもらつことにしました。幸い、大学からフィールドワークの補助金を得ることができ、これまでの現地からのデータを整理するなどの準備をして、出かけました。各事務所を訪問して、自分の目や耳で確かめることはやはり大切で、今まで知っていたつもりのことが勘違いだつたり、内実を肌で感じることもありました。

例えは、「セルノブイリの消防士たち」基金で話を聞いているうちに、以前の「事故処理作業者協会」から名称が変わっただけなのだと、これまで皆で認識していたことが、実は「別に新しい団体として設立されていた」のだと、はっきりしました。これは、消防局が、内務省の管轄から非常事態省に変わったことがいきさつでした。代表のチュマクさんのお話では、「救援・中部」からの支援と、自分たちの活動で集めた資金は、同じぐらいの割合であること、事故後、所属する事故処理作業者で亡くなった人が41人、障害者が66人で、「墓場に向かって、行列を作っているような状態だ」ということでした。消防局内の新しい医療センターに、無料で検診を受けられる医療機器を入れるのが、今の課題です。

「リクビダートル」基金の現事務所は、見るからにソ連時代から補修もされていない建物の一部屋で、「19年が経ち、セルノブイリ問題には誰も注意を払わず、患者が自分たちで問題に取り組んでいるのです。以前に経験した問題を教訓にシステムを改善し、会員にさらに効率的な支援をしていきたい」と、人道支援物資を分配したり、努力していました。もうすぐ、新しい事務所に変われるそうです。

「障害者協会」（通称）の引っ越した事務所は、驚いたことに、普通のアパートの一階にある「市立成人病院の第2病院・歯科部門」の一角でした。「ここで、被災者に無料で歯の治療ができるようにしたい。技術と知識はあるが、資金がなくてできない」と言う歯科主任のお医者さんに、「草の根申請の可能性があるのでは？」と話してきました。

最後に、キエフ市デスニヤンスキー地区の「ゼムリヤキ」を訪ねました。この地区の中には、原発職員の町プリピヤチ市からの強制疎開者の人たちなどが、5万人以上住んでいます。着の身・着のまま疎開し、差別を受け、精神的トラウマの大きかった被災者の精神



〈キエフ市の市民団体「ゼムリヤキ」の事務所にて〉

的なリハビリとして、医療の問題のほか、障害者・子ども達・一人暮らしの人などを対象に、絵画・刺繡・料理・音楽会などのサークル活動も行っています。涙ながらに避難の様子を語ってくれた女性たちを中心に、活発に支援活動をしています。

(戸村京子)

クリミア半島(オデッサ&ヤルタ)の旅

今まで、ウクライナへは何度となく訪問する機会に恵まれました。キエフ:ボリスピリ空港から入国後、首都キエフを迂回し、消防局のマイクロバスに揺られて3時間30分のドライブ。互いの近況を尋ね、滞在中のプランを確認しているうちにジトーミルへ到着。そして、運営委員会から託された業務内容に従い、仕事を終える。夕食後、宿泊先の部屋へ戻り1日の反省と翌日の打ち合わせ…息が抜けるのは、夜半にベッドに入ってから…。代表団としての訪問は、支援者の代理訪問ということです。訪問中は緊張し、気を抜かず日程を終えなければいけません。羽目を外すなど、もっての外です…。

しかし、この夏は、プライベートな旅行をする機会に恵まれました。およそ一週間は、戸村さんの聞き取り調査を手伝いましたが、その後は夜行列車に乗り、クリミア半島に向けて観光の旅に出ました。初めて訪問したオデッサ。かつて、救援・中部が名港海運の協力を得て、名古屋港から贈った支援物資は、この港に着きました。キエフから列車で9時間半も離れた、黒海に面した港町。「キリチャンスキー氏達は、こんなに遠くまで、トラックをしつらえて日本からの支援物資を受け取りに来ただんなあ」…と感動しました。

再び夜行に乗り、シンフェローポリを経てヤルタへ。ロシア時代には貴族のリゾート地だったというこの町には、黒海を見下ろす小高い丘に建つ豪華なリヴァーディア城、そしてゴージャスな家族がそぞろ歩く海岸通り…。ジトーミルの素朴さが、懐かしく思われました。ヤルタからバスに乗り、バフチサラーライへも足を伸ばしました。

今回の移動手段で楽しみだったのは、何と言っても夜行列車です。4人1部屋で、2段ベッドになっていました。1車両に一人のコンシェルジュがいて、乗車券の確認とシート配りの後で、注文したお茶はベッド脇まで持ってきててくれるサービスをしてくれたし、線路のつなぎ目でガタゴトガタゴト…寝入った頃にガッチャーンと、BGMもまあまあでした。

ジトーミル市内でも見かける小型の乗り合いバスは、なかなか興味深いものがあります。定員15人程の小型バスの窓ガラスに、ルート番号が貼ってあり、バスの出発地から目的地までのどこでも、乗りたいところから乗り、降りたいところで降りることができます。料金は、定期バスよりも割高ですが、便利なので人気があり、通りかかったお目当てのバスに「乗りたい!」と合図を送って、「ごめんよ!」と乗車拒否されてしまいました。明らかに座席数より多い乗車人数を見れば、諦めるしかありません。私達が予約をして乗車したバスは、ターミナルを出るとすぐに顔なじみと思われる客を乗せ、20グリヴナ紙幣を受け取りました。予約人数よりも多いお客様を乗せて、受け取った料金はいったいどうなるんだろう…と要らぬ心配をしつつ、帰路につきました。この乗り合いバスのシステムは、ジトーミルだけでなくヤルタの町でも同じで、どうやらウクライナの常識のようです。

(神野美知江)



〈オデッサで知り合った、親日家の女性〉

「チェルノブイリ 20 周年スタディ・ツアー」に東京からも参加します。



〈アレクシエーウィチさんを案内する増田さん(右)〉

エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金:増田浩司
カタログハウスの呼びかけで始まった「チェル
ノブイリ救援市民連絡会」が、毎年1回開催され、
各団体の活動や情報の交換の場となっている。た
とえば、「救援・中部」が、2003年にアレクシ
エーウィチさんを招請するための実行委員会を呼
びかけたのも、この連絡会であった。

今年も6月25日に開催され、各団体の報告と
ともに、「チェルノブイリ 20 周年のシンポジウム

実行委員会」の呼びかけなどが行われた。その後の懇親会で、自治労OBの小林晃さんや
私が、「救援・中部」の参加者たちと意気投合し、「救援・中部」が主催する「20周年ス
タディ・ツアー」に、東京からもできるかぎり参加しようということになった。東京から
は、4-5人を目標に参加者を募っているところです。また、労働組合が主体である「東
京平和運動センター」や「草の根原水禁」などは、4月のスタディ・ツアー日程では参加
が難しいことから、「救援・中部」の協力のもとで、別途、7月頃に20人程のスタディ・
ツアーを、計画しているところです。チェルノブイリ救援活動を通じて、ネットワークが
少しずつ繋がることにこれからも期待しつつ、チェルノブイリ 20 周年にむけて、東京も
頑張っています。

ウクライナ講座について

去る8月20日(土)のウクライナ講座では、来年4月のスタディ・ツアーに向けての準備を行いました。スタディ・ツアーのメインイベントの「日ウ交流会」で予定している「1グリブナキャンペーン」で販売するグッズの袋詰めです。「1グリブナキャンペーン」(1グリブナ約20円…ただし、ウクライナの年金額が320グリブナ/月程度であることを考えると、日本なら500円ぐらいの価値があります。)とは、ホステージ基金がナロジチ病院と州立小児病院の子ども達を救うために、ジトーミルで行っているキャンペーンです。キリチャンスキーさん達の努力の甲斐あって、寄付金は集まっているようです。そこで、私たちも現地でお手伝いをすることにしました。日本の方から寄付していただいたグッズを、交流会当日に1グリブナで販売し、現地の市民に買ってもらう、という趣向です。

そこで販売するグッズを募集します。軽くて小さくて、買いたくなるようなお得なもの(ただし新品に限る)。ご協力よろしくお願ひします。

10月のウクライナ講座は、15日(土)あいちNPO交流プラザ・会議室A(地下鉄「市役所」下車)で、翌16日の「コラボフェスタ(p7参照)」の準備をします。

12月のウクライナ講座は、10日(土)13時30分より、あいちNPO交流プラザ・会議室A(地下鉄「市役所」駅下車・052-961-8100)で行います。ウクライナ人のお客様をお招きして、現地のお話をたっぷり聞きたいと思います。どうぞお楽しみに。

愛知県幡豆町で講演会

愛知県幡豆町で8月5日、切尔ノブイリ講演会が行われました。幡豆町は、愛知万博で「ウクライナの受け入れ町」として、1年前からウクライナについて様々な学習会や講演会を行ってきました。この日は、同町の高校生の提案で、切尔ノブイリを取り上げることになったのです。「救援・中部」から、河田が出かけました。



金曜日にも関わらず、約50名の町民が参加、熱心に聞いていただきました。現地の写真や被害データなどを、できたてのパワーポイントを使った資料で、大画面に投影し見ていただきました。

万博が終わっても、ウクライナに関心を持っていただけると期待しています。これを機に、同町は、10月29、30日の町民文化祭で、「切尔ノブイリの子ども達の絵画展」をやってくださることになりました。感謝。

(河田)

「ワールド・コラボ・フェスタ2005」で会いましょう

来る10月16日(日)、名古屋栄の久屋大通公園「もちの木広場」において、大規模な国際交流のイベントが行われ、「救援・中部」もブース出展します。

このイベントは、毎年10月の「国際協力月間」にちなんだもので、近隣のNGOの活動を紹介するブースや、留学生はじめ在住外国人による企画・出展など、多彩な催し物で楽しませてくれるようです。

「救援・中部」はこの出展で、積極的にスタディ・ツアーや参加を呼びかける予定です。皆さんも、ぜひお気軽に足をお運びください。

(連載 その5)

事故処理作業者への支援

「チェルノブイリの人質たち」基金
代表ヴラディーミル・キリチャンスキー

実質上、過去10年間にわたって、「チェルノブイリ救援・中部」は、チェルノブイリ原発事故の事後処理作業にあたった人たちに、大きな支援を続けてきました。今日では、その対象は3つの組織、つまり、①慈善基金「チェルノブイリの消防士たち」・②慈善基金「リクヴィダートル[事故処理作業者]」・③ウクライナ国チェルノブイリ障害者支援基金ジーミル支部です。支援は主に、医薬品購入のための例年の国際送金という形で行われます。「チェルノブイリの消防士たち」は、その他にも、サナトリウムの保養券の入手に関して支援を受けています。

この場合、日本側は、「魚と釣り針」の原則に則っています。釣竿はめいめいに渡されました。中でも一番多くの「魚を釣り上げている」のは、「チェルノブイリの消防士たち」基金です。そのため、同基金が最も多くの支援を受けているのです。過去4年間だけでも、医薬品代としてほぼ30,000ドルが提供され、保養券入手には85,000ドルが配分されました(事故処理作業者の子ども達の分も含まれます)。

2年前、「救援・中部」・「チェルノブイリの消防士たち」・民間医療センターの3者の間で、「事故処理作業者の治療と保養に関する協定」が結ばれました。提供された28,200ドルのうち、すでに13,000ドルが使用されています。現在、この協定は見直されています。民間医療センターで経営上の困難が生じ、センターでは食事や宿泊ができなくなり、日帰り治療の場になってしまったからです。今後の治療は、放射線から住民を保護するセンターであるサナトリウム「デニシ」で行われるようになるかもしれません。その保養券はより高価ではありますか…。



〈キリチャンスキーさん(右)とドンチェヴァさん〉



〈「チェルノブイリの消防士たち」代表チュマクさん〉

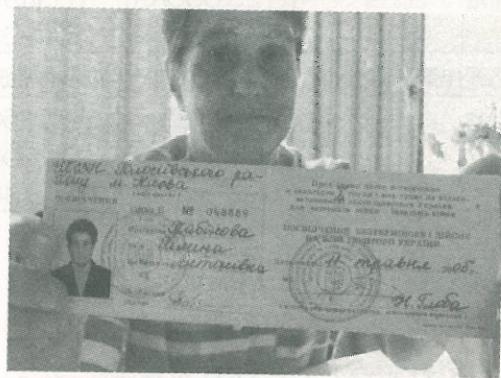
「チェルノブイリの消防士たち」は、日本からの支援を待たず、多くのことを自力でやりとげています。会員の事故処理作業者、チェルノブイリ原発での火災の消火にあたって亡くなった人の家族、毎年5~7人は亡くなっていく事故処理作業者の残されたお連れ合いの支援をしていますが、それは金銭的な援助・食品セ

ットの提供・冬の暖房のための薪や石炭の用意・古い建物の修理・畠の耕作や収穫の手伝いなどです。また、教育・啓蒙活動も幅広く行っており、ジトーミル市の消防局や他の村（汚染地域だけでなく）にチェルノブイリ事故の博物館を造ったり、チェルノブイリに関係のある集会その他の催しを組織したりしています。事故処理作業に自ら携わった元消防士たちは、しばしば学校や大学でスピーチをしています。

「チェルノブイリの消防士たち」は、日本からの代表団の受け入れに際して「チェルノブイリの人質たち」基金をサポートし、代表団との話し合いに参加します。基金は、メンバーの会費や個人からの寄附、以前、消防士だったり、事故処理作業者だったりして、現在はビジネスを成功させている事業家たちの援助によって運営されています。

慈善基金「リクヴィダートル」は、
○ チェルノブイリ障害者支援基金から
分かれて発足し2年になりますが、
やはり会費と個別の寄附によって存
続しています。ジトーミル州のさま
ざまな宗教団体が外国から受け取る
食品や中古衣料の提供を受け、それ
らを自力で会員たちに配布していま
す。ジトーミル市役所や州行政庁に働きかけて、個々の事故処理作業者たちに、主
にお金の支援が行われます。「チェルノブイリ救援・中部」から毎年提供される車椅子
の支援はとても重要なものです。「リクヴィダートル」基金は、チェルノブイリ
19周年記念の集いを立派に開催し、現在は20周年の行事の準備に入っています。

○ 残念ながら、チェルノブイリ障害者支援基金は、いつもあれこれの内紛に悩ま
れています。うまく意見を一致させることができないのです。彼らも宗教団体から
の支援を受けていますが、「リクヴィダートル」に比べればかなり規模の小さいもの



「リクヴィダートル」代表タビノヴァさん



「チェルノブイリ障害者支援基金」事務所にて

です。ですから、彼らは主に「チェル
ノブイリ救援・中部」の医薬品支援に
依存しています。しかし、私たちは、
この団体にも徐々に自力で「魚を釣
らせる」ことができるだろうと思っ
ています。とはいっても、日本から
の支援がなければやっていけないだ
ろうと付け加えなければなりません
が…。

来年4月26日で、チェルノブイリ原発事故から20年目を迎える。

今更ながら、この原発事故のもたらした惨禍の大きさを思う。二度とこの地球上に同じ事故が起こらないように、私たちがこの16年間に学んだことを振り返り、改めて何が問われているのかを考える。

ノーモア・チェルノブイリ!!

事故発生	1986年4月26日深夜に爆発、それから10日間火災が続く
事故原因	設計ミスと運転規則の違反
放出された放射能	1.1×10^{19} ベクレル (旧単位で約3億キュリー) : 炉心内の24%
セシウム137の放出量	8.5×10^{16} ベクレル (230万キュリー) : 広島原爆の約500倍
汚染面積	123,000Km ² (日本の面積の30%) (ウクライナ・ベラルーシ・ロシアの3ヶ国にまたがる)
事故処理作業者数	858,000人 (この中で既に5万人以上が死亡)。事故直後に31名が死亡
被災者数	緊急避難民 350,400人 (半径30Km以内の住民) 汚染地域住民 4,500,000人 (3カ国で) 事故による障害者数 148,000人

● 日本にもやってきた放射能

4月26日の原発事故を日本の我々が知ったのは、4月29日のテレビと30日の新聞だった。当時のソ連政府は事故発生を隠したが、事故直後にスウェーデンで多量の放射能が検出され、事実が明らかになった。日本にも放射能はやってきた。セシウム137の大気中濃度は、通常の4,500倍に急上昇した。

各地で野菜やお茶が汚染し、出荷停止を行った生協もあった。わずかながら母乳での検出もあった。日本人の平均体内放射能量は、通常の2倍の約50ベクレルに上昇した。この事故は、冷戦下の米ソ核開発競争で緊迫していたソ連経済を破壊し、ソ連崩壊のきっかけとなった。

● 広がった反原発

ドイツやスウェーデンを始めとする、ヨーロッパ各国では、野菜や牛乳が大量に廃棄されるなど、汚染が深刻になった。これを機に、原発の廃止を決める動きがヨーロッパ各国で相次ぎ、脱原発は世界の大きな流れになった。日本では、原発の出力調整運転の危険性が大きな争点になり、四国の伊方原発には、小さな子どもを持つ母親らを中心

に、大勢の市民が集まり反対を訴えた。チェルノブイリ事故を機に、世界の脱原発の流れは決定的になったといつて良い。それは、人類が広島・長崎で垣間見た放射能被害の恐ろしさの再確認であり、核の「軍事利用」だけでなく、「平和利用」もまた人類との共存を拒むものであることを、明らかにした。原子力の未来を約束するはずだった高速増殖炉も、事故が相次ぎ、期待した燃料増殖も起らぬ夢と消えた。

「もんじゅ」の事故にも懲りず、未だに核燃料サイクルの夢を追い続いているのは、地球上で唯一日本だけである。

● 私たちが心に刻むべきことは…

チェルノブイリの放射能は長く消えない。セシウム137の半減期は30年であり、300年後にやっと1,000分の1になる。チェルノブイリでは現在でも60%が残存し、汚染地域の人々を餓み続けている。日本で同様の事故が起これば、我々に移住すべき場所はない。そのことこそ、我々が学んだ最大の教訓である。来たるべき東海地震の前に、原発を停止しなくてはならない。

(河田)

竹内さんのウクライナ便り

9月8日、ユシェンコ大統領はティモシェンコ内閣の退陣を発表、首相代行として、ドニエプロペトロフスク州行政長官ハヌーロフ氏を指名しましたが、20日の最高会議ではその首相任命承認に過半数の投票を得ることができず、22日の再投票に先立ち、大統領はあの長い選挙戦を争った当の相手であるヤヌコーヴィチ氏の率いる「地域党」との協定を結び、同党の追加票を得てハヌーロフ首相の任命を勝ち取りました。これからハヌーロフ内閣の組閣が始まるわけですが、ユシェンコ氏のこのような決断に先立ち、「地域党」は、ティモシェンコ内閣解散後の「政治危機」を乗り切ろうと、氏の提唱した「ウクライナの将来のための団結・協力宣言」に同調した10の議会内派閥の一つにもなっていたわけです。一方、ティモシェンコ氏の率いる「ユーリヤ・ティモシェンコ・ブロック」は、共産党や統一社会民主党など従来の野党と軌を一にして、「宣言」にも加わらず、ハヌーロフ首相承認の投票では棄権しました。来年3月の最高会議選挙に向けて、諸政党の利害がどんな接近・離反を見せるのか、予測はまだまだ容易ではありません。

ところで、2003年のホロヴィツ・コンクールで入賞した大阪のSさんというピアニストが、コンクールで弾いたコセンコという作曲家の作品を日本でもコンサートのレパートリーに入れたいということで、コセンコに関する文献の調査を頼まれました。 Chernobyl accident の夜、消防士たちの被曝線量測定をして間接被曝した Nさんに、母娘でピアノ教師をしている知人がいると聞いていたので、この D 家の連絡先を教えてもらい、娘さ

んがキエフ音楽院在学中に書いたコセンコに関するレポートをコピーさせてもらったのですが、お母さんが教えているその名も「コセンコ記念音楽学校」を訪ねて行ったところ、ちょうど彼女がレッスンをしていた少年のお父さんは著名なチェリストで、日本でも演奏したことがあるという話でした。それはともかく、19世紀末にペテルブルグで生まれたコセンコは、1918年に同地の音楽院を卒業した後、1928年までジトーミルの音楽専門学校でピアノ科の講師を務め(その後は1938年の死に至るまで、キエフ音楽院の講師・教授)、ソロ及び室内楽のピアニストとしても名を成したということです。 Sさんは CD を出すことを考へていると言っていましたから、日本でもこのコセンコの名前がディスコグラフィーに入るようになるかもしれません。

さて、先号に書きました、「ボリスピリ空港の出国に際し税関チェックがなくなっていた」という話ですが、あれは過渡的な状態であつたらしく、現在では、所持金の合計が1,000ドル以下の人は税関を素通りできるものの、それ以上の金額を持っている人は、自主的にカウンターで申告書を出し、荷物も X 線検査を受ける、というなんとかよくわからない状況です。念のため付記します。(9月23日)



＜映画「戦艦ポチョムキン」のラストシーンで有名なオデッサの階段にて(2005.09)＞

事務局便り

「救援・中部」事務局では、このたび「パワーポイントを使った救援・中部の活動紹介ツール」を作成しました。ご存知の方も多いと思いますが、パワーポイントとは、パソコンのソフトウェアのひとつで、主に会社のプレゼンテーションなどに使われます。パソコンの画面上に、文字や写真がスライドのように映り、あたかも紙芝居のように、場面が移り変わっていきます。これを使うと、これまで紙で配布した資料をもとに口頭で説明していた「救援・中部」の活動が、よりわかりやすく理解していただけるということです。事務所ではすでに活用が始まっています、犬山中学の生徒達が訪問した時や、幡豆町に原発事故の説明を行った時にも利用しました。「救援・中部」の活動を知りたい方、また、これを使って活動に役立てたい方は、ご一報ください。（鈴村）

8月のはじめ、「ECC 地球救済キャンペーン」事務局長の小西さんが事務所を訪問され、今年の支援金の目録を届けてくださいました。ECCは、 Chernobyl 救援後まもなく、救援活動への深いご理解と情熱をもって、支援を続けてくださった企業です。その累計総額は、2000万円にもおよびます。今は亡き、理事長山口勇さんの手紙には、Chernobyl 救援の活動に対する全幅の信頼と深い理解があふれ、また、この活動へのECCの真摯な取り組みが綴られていました。改めて読み、身の引き締まる思いを感じました。

10月29日（土）～30日（日）に、幡豆町教育委員会生涯学習課主催で「Chernobyl の子ども達の絵画展」を行うことになりました。場所は、幡豆町の中央公民館。興味のある方は、是非、「救援・中部」事務局までお問い合わせください。（山盛）

編集後記

☆観光地は、いつも同じ賑わい…楽しげに笑い、語り合う人々。そこに紛れ込むと、放射能の被害など、どこの国の出来事か？と、我を忘れる。そんな時、ふとジトーミルの友人たちを思い出し、せめて彼らと共に楽しむ時間を大事にしようと決めた。（美）

☆複数の目撃情報によると、至近距離でも間違えるほどの私のそっくりさんが近所に住んでいるらしい。その人は私と間違えられて、さぞ迷惑していることだろう。（佳）

☆「つらいことも楽しいことも皆、私の人生。仕事も人と話すことも、好き。」強く、美しいキエフの『ゼムリヤキ』の女性たちだ。（京）

☆ウクライナのオヤジ達にとって、人生で最も大切なことは、次の2つだという。「子どもが1軒の家を作れるだけの木を植えておくこと」と「子孫のために伝えたいことを、一冊の詩や小説にすること」。私も共感を覚える年になったが、どちらもまだまだ道なかば。まずは「ポレーシュ 100号」かな。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷 「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473